

長は「養分を与えても砂と粘土といった物理的な構造自体は変わらない。作る前に土の特性が分かれば心構えや動き方は違ってくる」と話す。

J A十勝清水町の担当者は「末代まで畑を残していくための方法が求められている。被害状況は千差万別なので、個々に営農計画や収穫後の時期に話して対策を打たなければいけない」と長期の取り組みを念頭に置く。

作物の出来を見て、次の年の施肥や管理を変える。一年一作の中で、それを繰り返す。地道で長い年月がかかる土づくりを、十勝農業は大切にしてきた。

浅田さんは、今秋に復旧する4ヘクタールで小麦を作

付けし、残りは来春の営農再開を目指す。「簡単にはいかない。でも、やり方次第では元の土よりも良くなるかもしれない」。ゼロからのスタートにも必死に前を向いた。

◇ ◇

本格的な営農シーズンが訪れた農地で、今年の台風被害からの復旧と春作業が進んでいる。記録的な天候不順や豪雨が残した爪痕は大きく、教訓も多い。今年の経験は十勝農業が進むべき方向性を示唆している。

永久キャンペーン土づくり 耕土再生 (中)

2017年5月10日

天候不順の教訓 「取れた物 畑に返せ」 地力、技術で作柄に差



敷地に積んだ大量の堆肥の前に立つ石井さん（左）と祐一さん。堆肥作りは先々代から30年以上続けている

「そろそろ堆肥を切り返す（混ぜる）時期かい」
「そうだ。その次は7月だ。足りない分は買おう」

更別村上更別の約60ヘクタールで豆や小麦などを生産する石井農場。畑の一角に積んだ堆肥の前で、経営する石井和人さん（32）の問いに、父の祐一さん（63）が答えた。

祖父の代から

石井農場では毎年、牛ふんや麦かんなどを混ぜた堆肥を畑に与えている。その量は約700トン。20ヘクタールずつまくので1ヘクタール当たり年30、40トンの計算になる。堆肥は養分を与え、褐色火山灰土に足りない保水力を高める。祖父の代から続ける取り組みだ。

石井さんは昨年、経営を引き継いだばかり。その年が記録的な天候不順と重なった。経営責任を持つ中、思うように進まない作業への焦りと不安。「毎日が手探り。メンタルも大変だった」と振り返る。

生育は悪かったが、小豆の反収（10アール当たり収量）は210キロを確保し、ビートは1ヘクタール当たり72トンで村内平均を大きく上回った。祐一さんは「種をまいた日は他と同じ。地力だったのでは」と要因を語る。

◇

前年の大豊作が一転して、2016年は畑作4品目すべてが平年を下回る作柄になった十勝農業。関係者は気象条件が厳しいほど、農家個々の経営で作柄に差が出ると指摘する。

J Aさらべつの内海誠営農部長は、安定的な収量を残す経営の共通点に、輪作を守ることや、化学肥料に頼りすぎない土づくりの努力を挙げる。収益を優先して豆類や小麦を増やせば土への負荷も増える。「ほ場の条件はさまざまだが、去年のような年は連作障害が出やすい。あとは臨機応変にやる技術力」と語る。

堆肥による地力向上は一般的だが、「当たり前のことを当たり前続けるのは難しい」と話すのが十勝農業改良普及センターの三宅俊秀所長。「そして優れた農家ほど、ほ場をよく見る。どこかの排水が良いか悪いかを考え、毎作をコントロールしている」と話す。

雨の日こそ畑に

音更町のベテラン農家（69）は「最近の若い農家は気候の恵まれた年しか経験していない。雨の日こそ畑に出て、水がたまりやすい場所を溝切り（排水対策）するんだ」と心掛けを語った。

石井農場には「取れた物は畑に返せ」という家訓がある。収穫した分、土地はやせるので、収益は堆肥などで畑に戻すとの意味だ。石井さんは「悪い年でも、いい作物もあったのは、じいちゃんの代からの積み重ねがあってこそ。土づくりが大事だと改めて身に染み」と話す。祐一さんの「災害は忘れたころにやってくる」との忠告には、「2、3年良くても忘れないようにしないと」と自分に言い聞かせた。

天災と湿害で十勝農業史に残る「2016（平成28）年」は、若い世代の農家に大きな経験と教訓を与えている。